

序

研修医のみなさま、そして、研修医を教えるためにこっそり栄養の勉強をされたい先輩指導医のみなさま、お待たせしました。

2016年にレジデントノート増刊号『栄養療法がわかる！できる！』を発刊してから、早くも10年が経ちました。

あの頃研修医だった先生方は、今や中堅として現場を支える立場になられていることでしょう。振り返れば、この10年で急性期栄養療法をとり巻く環境は大きく変わりました。エビデンスは飛躍的に増え、やった方がいいことが明確になり、病棟には管理栄養士が加わり、学生時代から栄養を学ぶ機会も増えました。書店には関連書籍が並び、学会や研修会でも栄養の話題は珍しくなくなりました。かつては一部の専門家の領域と思われていた栄養療法は、「特別な治療」ではなく、日常診療のなかで当たり前に考えるべき“栄養治療”とまで言われる時代になってきたのです。

それでも、現場ではまだ「栄養は大事だとわかっているけれど、どう介入すればいいのか迷う」という声を耳にします。患者さんの全身状態、基礎疾患、治療方針、社会背景——それらを踏まえて最適な栄養管理を選び、実行するのは簡単ではありません。私は今でも、栄養療法は“治療のジョーカー”だと考えています。うまく使えば患者さんの回復力を高める切り札となり、一歩間違えば合併症を招く諸刃の剣。まさに、栄養だけに“さじ加減”が大切なのです。

私は毎年、研修医の先生方に急性期栄養療法の講義を行う際、アンケートをとっています。以前は「講義やセミナーで学びたい」という声が多かったのですが、コロナ禍以降でしょうか、「マンツーマンや書籍で学びたい」という声も増えてきました。限られた時間のなかで、自分のペースで深く学びたいというニーズが高まっているのを感じます。

今回の増刊号では、研修医に近い存在の先生方、現場の悩みをよく知る先生方に執筆をお願いしました。みなさんに先駆けて、講師の先生方の講演をすべて拝聴し（原稿をすべて拝読し）、研修医の先生が知りたい、質問したいであろう内容を、私自身が研修医になりきってぶつけ、掘り下げて解説していただきました。前回の内容を補足しつつ、この10年で得られた新しい知見や実践の工夫を、現場の視点でまとめています。困った症例に出会ったときに第2章から読みはじめてもよし、基礎からじっくり学びたいときに最初から読み進めてもよし。忙しい日々のなかでも、必要なときに必要なページへ、自由に行き来できる構成です。

本書は単なる知識集ではありません。各稿には、筆者が実際に経験した症例や、チーム医療のなかでの工夫、判断の背景にある考え方も盛り込みました。ページをめくるたびに、知識は地図となり、経験は道しるべとなって、皆さんの診療を支えてくれるはずです。

栄養の世界は知れば知るほど奥が深く、学びは診療の質を確実に変えていきます。

この一冊が、日々の診療に新たな視点と自信をもたらし、患者さんの回復を支える力となることを願っています。

HAVE A GOOD LEARNING ! ENJOY !

2025年12月

長崎大学病院 栄養管理センター / 高度救命救急センター / 医療教育開発センター
泉野浩生